

なにやら大時代な、気取った、誇張にみちて偽善的な響き。むろん、いわゆる悲劇的な事件や事態がなくなったわけではないだろう。それどころか、毎朝の眼覚めとともに、それは新聞やテレビの画面を通じて絶えずわれわれのもとに運ばれてくる。ただ、なぜかそれは、われわれの意識の表面を軽く通過するだけで、それを根底から揺り動かすような深みにまで達することがほとんどないのだ。あえて悲劇的と呼ぶことがためらわれる所以である。もしそれでもなおそれを悲劇的と呼ぶ場合には、かえって事実がイロニックに歪曲されてしまいかねないことをわれわれは知っている。言葉と事実との奇妙な背反関係がそこにはあるが、こうした背反関係を生みだしているものものもけっきょくわれわれの存在様式そのものにほかならないのかもしれない。

われわれはいま、たしかに奇妙な混乱と不信の中にいる。不信は事実に向けられているのか、それとも言葉に向けられているのか、かならずしも定かではない。たぶんその両方にだ。科学の進歩、生産手段とマス・コミュニケーションの異常な発達。物質的な富や福祉の増大。ところが、世界はますます不可視の彼方におしやられ、人びとはますます自分だけの生活の殻の中に閉じ籠もろうとしている。いまでは、すべてが無意味であると信じるのになんの哲理をも必要としない。近代の努力は、精神的にみればニヒリズムとの戦いであったはずだ。血と火と軍旗とに派手に彩られたニヒリズムとの戦い。ところが、われわれはいま、穏やかで快適で、いくらかくたびれた微笑を浮かべているもう一つのニヒリズムの真只中で、とまどい、途方に暮れているという次第だ。敵の存在さえ見失ってしまった以上、戦いの方途の立てようもないではないか。あらかじめ戦いを放棄してしまっているニヒリズム。精神のあらゆる葛藤を失ったニヒリズム。ということは、まさしく人

Jean-Marie Domenach :
Le Retour du Tragique

渋 沢 孝 輔

「悲劇的」という言葉は、今日ではいささかアナクロニックな響きがしないでもない。

間そのものが失われようとしていることではないか。

Jean-Marie Domenach: Le retour du tragique は、およそそのような状況を踏まえたうえで、ギリシャ以来の西欧の歴史を、人間の自己超出への悲劇的な努力の歴史とみなしながら、tragique の概念を基軸にして生の意義の所在を問おうとしたものである。Domenach の名はこの国ではあまりなじみがないが、1922 年リオン生まれ、学業半ばで抵抗運動に参加、一九四六年、Emmanuel Mounier に請われて、雑誌《Esprit》の編集に加わり、Mounier の没後、同誌の主幹となって今日に至っている。Mounier の急進的キリスト教の影響下にある思想家らしく、政治にたいする関心も深く、〈永遠の作家〉叢書で《Barrès par lui-même》を書いているほか、《Yougoslavie》、《Gilbert Dru, celui qui croyait au ciel》、《La propagande politique》などの著書がある。本書は三部から成っていて、第一部〈Tragique et tragédie〉では、tragique の概念規定と、ギリシャ悲劇以来のその変遷過程、およびその形而上的構造とでもいうべきものが、第二部〈Le tragique politique〉では、サン＝ジュストからヘーゲル、ニーチェ、スターリン、ヒトラーを経てマルローにまで至る、近代政治思想史上に現われた tragique の分析、第三部〈Résurrection de la tragédie〉では、主としてヨネスコ、ベケット等の劇作を通して現代における tragique の在りようが論じられている。これでもわかるように、著者の意図は、本来演劇上の概念である tragique (悲劇的なもの) の照明の下に、演劇を中心とした文学・哲学を素材としながら、広く政治の分野まで含むヨーロッパの精神史を、総括的に論じようということであるように思われる。知的探求と実践との不可分の結びつきに、真の思想的営為をみている著

者の面目の存するところであろう。

それにしても、tragique などという概念を、これほど広汎な精神史の基軸に据えるというのはどういうことか。神の不在が露わになってからというもの、その空白を埋めるべく、いくつもの巨大な体系や教義が現われた。マルクス主義、フロイディズム、実存主義、テイヤルディズム……。世界の不可視の動きに不変の原理を対抗させて生きたいというのは、いつの時代にも変わらぬ欲求であるが、現代の特徴は、なるべく苦しまずに目的を達しようと望むところにある。人びとは思想にひたすら鎮静剤を求めている。世界を説明しつくし、闇の部分を取り払って、安らかに、晴れやかな未来へと進んでゆければいい。そこでは、魂の深淵においてはじめて成就されるたぐいの進歩などは、問題にもならないかのようだ。今世紀の不幸の大きな部分は、もともと荷ないきれもしない理想の数々を信じてしまったこと、あるいは信じるようなふりをしたところ由来している、と著者はいう。本書はむしろ、つぎのような自覚から出発しようとする。すなわち、事物や人間の心情の奥底では、暗々裡に一つの批評意識が働いているが、必要なことは、それを抑えつけることではなく、それと共に歩み、むしろそれが次第に熟していくよう助けること。

この発生状態にある意識を、その混沌と矛盾のままに識別するのに恰好の方法こそ、ほかでもない悲劇のヴィジョンである。なぜなら、tragique は、解明する前に、予感し、予告するものだからであり、決定的な裁定や結論を、可能なかぎりひきのばすことをも許してくれるものだからだ。曖昧さこそ、その本来的な領域である。そこでは、真実が、弁証法による場合のようにむりやり駆り集められ、石で固められるようなことはない。真実はその原初的な生命力を維持し、たがいに不

調和があってもそのままに生き、時に変貌もする。われわれがいま必要としているのは、イデオログたち、道士たち、学者たちが提供するあらゆる単純化の方式よりも、このような生きた尺度である。

いうまでもなくここには、現代の人間に関する諸科学への強い不信、すべてを記号と統計に還元してしまおうとする科学への強い不信があるが、著者が、現実認識の素材として文学をことさら重視しているのも理由のないことではない。文学こそ、前に触れた発生状態にある意識が活躍するのに最適の舞台だからであり、そもそも、こうした意識の存在や、それによる思考方法を最初に啓示したのもまた文学、ギリシャの文学であった。西欧思想の本質的な一要素はギリシャ文学の中に生まれた。tragique とは悲劇から発したものであるが、以後、この tragique は、哲学的思索や政治行動を絶えず挑発し導きつづけ、近代のもっとも能動的な哲学やもっとも決定的な革命は、すべて、25 世紀前にギリシャの空の下で口火を切られた一つの挑戦に、あらためて立ち向かおうとした努力の現われに他ならないとみなすことができるほどである。そう Domenach は断言するのである。

tragique を方法化することによって、ヨーロッパ史の全体を裁断するというのは、いかにも大胆な試みにちがいない。方法化あるいは裁断といっても、むしろ一見曖昧な領域にあえて踏みとどまることによって、歴史を貫ぬく人間精神の本源的な活力を甦えらせることこそ、著者の眼目である。ただその際にも、今日のような、社会学、政治学、心理学等が人間にたいする接近の方法として支配的な位置を占めつつある時代に、彼の〈演劇的接近〉なるものが、はたしてどれだけの効力をもちうるかは当然問題にされなければならない。著者もその点にはかなり神経質になっ

ているが、ここでもまた注目すべきことは、今日の社会学や心理学自体が、一つの tragique をはらんでしまっているということである。科学はほとんど必然的に分化の度合を深めてきているが、分化の度合が深まることによって、綿密になればなるほど、当初の主題そのものは後方に遠ざかってゆくようにみえる。社会学者は、手に負えないジャングルの国を占領しようとしている軍隊を思わせる、と Domenach はいう。彼らは斥候隊を派遣し、司令所をいくつも設けて、ジャングルをおさえたつもりになっているが、土民たちは次第に地下にもぐり、公の生活の背後で、内密な、闇に包まれた生活を営んでいる。社会学はたしかにいくつかの神話を清算してくれたが、その科学としての役割は、本来主体的であるべきものを客体化するところにあるのであり、いいかえれば、本質的に人間的な部分において人間主体を破壊するものである。われわれが自国の青年たちについてよりも、ポロロ族やダヤク族についてより詳しいというのも、考えてみればいかにも奇妙なことではないか、と、Domenach の筆鋒はなかなか手きびしい。

しかし、tragique はどのようにも科学の敵対者などではない、と彼はさらに断わっている。問題は、より豊かな、より透徹した視野を開くことであって、tragique が拒否するものは、人間の条件をさまざまの統計に還元し、希望を数学的イデオロギーにまで還元してしまおうとする一傾向である。ここで、近頃はやりのいわゆる未来学なるものが槍玉にあげられるわけであるが、確率による見通しが真の冒険にとって代り、電子計算機による青ざめた道筋が、人間の運命を代行するような事態が、彼には我慢がならないのである。世界の事物のメカニズムや、役割や、機能を知らぬのはいい。けれども事態はつねに動く。一つの事態が、まったく反対の事態に到りつ

くことも稀ではない。それを説明するものは何なのか。行政機構が、なぜビューロクラシーへと変貌し、社会主義が、なぜ圧制へと、正義が、なぜ特権へと変わらなければならないのか。なぜ Kommunismus はスターリンを生みだし、なぜ社会民主主義はギー・モレーを生み出したのか。われわれが今日不平をいつている社会は、前世紀の人間にとってのユートピアそのものではないか。前世紀にくらべて、人は少しも自由になったようにはみえない。とすれば腐敗はどこから忍び込んできたのか。これらの間に答えるただ一つのものこそ、もと、悪についての本源的な直観から生まれた tragique であるということになるだろう。

くりかえしていえば、tragique とは、固定したイデオロギーでもなければ、ドグマでもない。それはあるいは問題にたいする答えでさえなく、むしろ単に一つの態度、解答もなく、救いもないまま、苦悶の状況に置かれている人間の、それでもなお、いわば自己超出の意欲に導かれてあえて不可能に挑もうとする一つの態度なのだといふべきかもしれない。それはもともとすぐれて西欧的なものであるが、その西欧においても、主体的な自己超出への意欲の喪失、精神の葛藤を失ったニヒリズムの瀰漫はかなり一般的であるようだ。敵が見えないのなら、なぜ自分自身を敵としないのか、と Domenach は問うのである。一つの貧しい時代、〈乏しき時代〉への告発の激しさに、われわれもまた胸をゆすぶられずにはいない。

Jean-Marie Domenach : *Le Retour du Tragique*, Edition du Seuil, 1967